

幕末民衆の恐怖と妄想

— 駿河国大宮町のコレラ騒動 —

高橋 敏

Fear and Delusion in Bakumatsu Japan: The Cholera Disturbance in Omiyacho, Suruga Province

はじめに

- ① 世直しの予兆
- ② 大宮町のコレラ
- ③ 死の恐怖と妄想
- ④ コレラの除災儀礼—くだ狐に三峯山の御犬
- ⑤ 民衆の宗教構造
おわりに

〔論文要旨〕

生命の危機にさらされたとき人々はこのように立ち向かうのか。日本歴史上人々は天変地異の大災害や即死病といわれる伝染病の大流行に直面した。文明の進歩、医学の革新等、人々の生命に関する恐怖感は遠のいたと一見思われがちの現代であるが、二〇〇三年のSARSの大騒動は未だ伝染病の脅威が身近に存在することを思い知らしめてくれた。

本稿は安政五年（一八五八）突如大流行したコレラによって引き起こされた危機的状況、パニック状態を刻明に実証しようとしたものである。人々は即死病といって恐れられたコレラが襲って来る危機的状況のなかでどのようにこれに対処したのか、本稿は駿河国富士郡大宮町（現富士宮市）を具体例として取り上げる。偶々大宮町の一人町人が克明に記録した袖日記を解説することから始める。

長崎寄港の米艦乗組員から上陸したコレラ菌は東へ東へ移動し次々と不可思議な病

いを伝染させ、未曾有の多量死を現実のものとした。コレラに対するさまざまな医療行為が試みられるが、一方で多種多様、多彩な情報を生み出し、妄想をまき散らしていく。まさに、現実の秩序がくつがえる如く、人々を安心立命させていた精神（心）の枠組が崩壊し、人々はあるあらゆる響き鎮魂の呪術を動員し救いを求めていく。

コレラ伝染の時間的経過と空間的ひろがりに対応して人々の動きは活発化し、非日常の異常に自らを置く方策を腐心していく。

コレラの根源を旧来の迷信の狐の仕業、くだ狐と見なして狐を払うため山犬、狼を設定し、三峯山の御犬を借りようとする動きやこの地域に特に根強い影響力を有する日蓮宗の七面山信仰がコレラを抑える霊力をもつとして登場する。

極限状況の人々の動向にこそ時代と社会の精神構造があらわにされるのである。

はじめに

人類の歴史にとって変革とは、膨大な時間の経過と蓄積とを区分して、新たな時間を再生してくれる最も魅力的な一章である。中でも人々が時代と社会の変革を何をもって受け入れ、迎えたのか、もっと積極的に言うなら、何をもって変革と認識しこれに参画したのかという、民衆の心理に思いをめぐらせるのは最も緊張はするが楽しいひとときでもある。すでに述べたように、嘉永六年（一八五三）に祖法ともいうべき鎖国の建前を崩壊させた異国異人の黒船の耳をつんざくような砲声に始まり、日の本の神々の怒りとも思われる天地を動転させるかのような安政二年（一八五五）の大地震と大津波の襲来がつづき、否が上にも人々は世直しの観を強くしていった。⁽¹⁾

夷狄とされ、見てはならなかった「異」が公然と神仏の国日本に土足のまま上がり込み、国土は地震と津波、そして火災でこの世とも思えぬ焦土と化した。両者は習合し、末法の世界、世紀末の社会を演出して恐怖をおおひ、世は根底からひっくりかえるのではないかと思わせた。そこに安政五年コレラが襲いかかったのである。

黒船が近代文明国家の開化啓蒙の使徒、いわば歴史の表舞台に登場した正義の使者とすれば、コレラはやや遅れてやって来たもうひとつの歓迎されざる暗黒の密入国者であった。

コレラは遠くインドのガンジス川流域の下ベンガル地域に盤踞する一種の風土病であった。流行伝染があったにせよインド国内に止まるのが通例であった。このインドの風土病が世界を席卷し、地球規模で人々を死の恐怖に駆り立てるに至ったのには、イギリスのインドの植民地化にはじまる欧米列強のアジア・アフリカ侵略の歴史があった。文明の東漸をもって啓蒙の善として語られようが、欧米の国々が引き起こした人と

モノの大移動は、一方でインドの小地域に潜み平和に生息していたコレラ菌にも世界制覇の野望実現させたのである。まさにコレラはもうひとつの苦渋に満ちた世界史の成立を告知してくれている。⁽²⁾

コレラの大流行（パンデミー）は一九世紀五次にわたった。第一次は一八一七年のインド植民地化の画期となった第三次マラーター戦争に端を発し、感染したイギリス軍兵士の移動とともにコレラ菌は運ばれ、中国、東南アジア、そして日本にも上陸した。文政五年（一八二二）のコレラである。このとき朝鮮半島かジャワ半島のいずれかから渡来したコレラは、西日本を中心に広がったが、東海道駿河国沼津辺りで止まり、箱根を越えることはなかった。

次に日本を襲ったのが第三次パンデミーの安政五年（一八五八）である。

安政のコレラは初発から「異」のイメージに彩られていた。日本上陸の地点が鎖国体制下唯一の開港地長崎であった。また、歓迎されざるインペイダーを運んで来たのは、砲艦外交で幕府を開国に追い込んだアメリカの、しかも軍艦ミシシッピであった。またしてもアメリカが張本人であるとの情報が、天変地異と連動・増幅してアメリカ狐の出現に手を貸すことになった。

安政五年五月二一日のミシシッピの長崎入港から約一ヶ月後、六月一日日米修好通商条約が江戸湾内に停泊する米艦ポーハタンの艦上で調印される。これに続きロシアは特派大使プチャーチン、イギリスはエルギン、フランスはグローを派遣してそれぞれ七月一日、七月十八日、九月三日条約が次々と締結される。「異」のイメージは益々高まっていった。しかも実質上の開国となる通商条約をめぐっては内政が紛議し、弱体化した幕府は朝廷の勅許を得ようとするが失敗し、勅許なしの調印断行となってしまった。これに將軍家定の継嗣をめぐる政争が加わり、遂には七月六日家定死去を契機に安政大獄を辞さない大老井伊直弼主導の

強権政治を出現させた。

「異」に加えるに天変地異、そして内政の混乱は人々に不安と同時に世直しの気運を醸成していた。ちょうどこれと揆を一にして五月二日長崎に上陸したコレラは、六月初頭に長崎周辺、下旬には西日本から東海道へ進出し、七月下旬には巨大都市江戸に達した。日本初のコレラの大流行、大量死の恐怖が日本各地を覆った。³⁾

コレラが世界史の成立、近代の誕生のもうひとつ隠れた立役者となったのには、それなりの伝染病としてのたくましさがあった。

(一) 被患してからの死亡率「致死率」が、一九世紀の伝染病のなかで一際高かった。

(二) 発病から死に至るまでが迅速を極め、即死病、一日ころり、三日ころりと恐れられた。

(三) コレラ患者の症状が異様であった。ヨーロッパでは「青い恐怖」と呼ばれたが、日本でもこぶが出来、筋をつめて、黒くひからびて死にいった。

この三点のコレラの特異性は、人々を恐怖に駆り立て妄想の限りをつくすに十分であった。そして、これを恐れ除去するために人々はありとあらゆる呪術・宗教儀礼に救いを求めることになった。

民衆は安政五年のコレラをどのように迎え、これと対峙したのか。人々は恐怖と不安が膨張するなかでどのように生きたのか。民衆の心意、精神生活と深く関わる問題である。

フィールドワークに基づく極めて実証的な地域史研究によって、コレラと地域社会、そして民衆の心意に迫ってみたいと思う。

人命が根底から脅かされたとき、人々はどのような心意に置かれるのか、またいかにこれに対応出来るのか。科学がどんなに進歩しようが自然の摂理を克服することは出来ない。突如襲いかかる自然災害、またこれと連動して起こる二次、三次の文明社会の組織体系そのものがもたら

す人的災害から人類は決して解放されたとはいえない。

安政五年（一八五八）六月、長崎寄港の米艦ミシシッピの乗組員から上陸したコレラは、以後一路東上して膨大な死者を出し、人々を恐怖のどん底に突き落とし、一日コロリ、三日コロリ、即死病と呼ばれ恐れられた。

まず、第一にコレラ大流行の危機的状況とは具体的にどのようなものであったのか。人々はどのような状況に置かれていたかということでもある。第二に、猛威を振るうコレラを前に、人々はどのような対応を迫られたのか。民衆の危機対応である。

生命を危うくする極限状況に立ち至ったときの民衆の心意の問題でもある。また、めまぐるしく変化する民衆の心意のキーワードになるものが情報である。虚実に入り交じって錯綜する情報が、危機的状況にある人々の心意に重大な影響を及ぼす。この複雑怪奇なシステムを明らかにすることが、安政五年コレラ騒動を取り上げる基本的視角である。

このような問題視角に迫るためにどのような研究方法があるのか。最も望ましいのはコレラに直面、体験した人々が直接記録した資料を探し出すことである。これを可能にしてくれるのは近年活発に行われている民衆の日記類の調査である。十九世紀後半ともなると識字力は高揚し、公文書のみならず家業の経営はもとより俳諧・和歌・漢詩文等の素養を身につけ、国内政治から異国へと好奇心を持つ文人趣味の百姓町人も少なくなかった。日々の出来事を丹念に記したいわゆる日記と、これらを基礎に特記事項をまとめた事件簿ともいべき年代記類がつくられていた。

これらを丁寧に読み解くことによってコレラに遭遇、死の恐怖に置かれた人々の状況が明らかにされるであろう。

ここでは安政五年のコレラ騒動に焦点を絞って、フィールドは駿河国富士郡大宮町（現富士宮市）の事例を取り上げ分析する。⁴⁾ 大宮町は天下

の霊峰富士山の南麓に門前町として栄えた。富士山を御神体とする富士浅間大社の総本山が置かれ、富士参詣の登山口としても賑わった。町高一四九四石余、支配は浅間社領と天領の葦山代官の二給であった。

それというのは、分析対象となる日記が、大宮町の町人で酒造業を営む横関家の九代弥兵衛が書き残したものであるからである。安政五年次三九歳の働き盛りである。家族構成は妻三二歳、長男一二歳、長女九歳、次女六歳、それに大店を支える奉公人男子六人、女子一人である。

①世直しの予兆

「異」の登場

嘉永六年（一八五三）六月三日、ペリーの率いる四隻のアメリカ艦隊が江戸湾深く侵入し、幕府に開国を迫った。鎖国による天下泰平の平和は、一瞬のうちに危機にさらされた。混迷を極める幕閣の悩みを見透かしたかのように、一旦は引き上げたものの、約束通り翌七年二月、江戸湾に再び姿を見せたペリーは、砲艦外交そのままに、武力を背景に三月三日、日米和親条約を締結させ、二世紀半にも及んだ祖法鎖国に終止符を打たせた。この一八〇度の転換は、民衆に幕府への不安と不信を与えた。

天変地異の響き

一方、外からの兆候と揆を一にして大地を震わせる地ならしの響きが民衆を恐怖に落としていった。嘉永六年二月の江戸地震に続き、翌年一月四日に駿河・遠江・伊豆・相模に大地震と大津波が起こり、未曾有の被害が出たのである。そして翌々安政二年（一八五五）になると、七月の大暴風雨を皮切りに一〇月二日江戸を大地震が襲った。倒壊家屋一万四〇〇〇戸、死者七〇〇〇人余の被害を与えた安政大地震である。

地面を震わせ、天地の逆転を思わせる大地震と天下の祖法を破った異国との和親は深く融合して、民衆に世ならしの不安と、また同時に祝祭へ反転していくきっかけを与えた。

伊豆・駿河・遠江は、江戸・京都・大阪を結ぶ陸上交通の要路、東海道が東西に貫通しており、緊張関係が高まる幕府・朝廷・西南諸藩の情報が交叉し、それらがさまざまな形で伝播し、民衆を動揺させた。また、伊豆は江戸を守る意味で要衝であり、下田が葦山代官江川太郎左衛門の建言もあって日米和親条約によって開港場とされたことも、異国船・異人への恐怖と好奇心を募らせた。天変地異と「異」の衝撃に続き民衆に死の恐怖を現実にしたのが、安政五年の即死病コレラの流行であった。人々に与えたコレラの衝撃は、西欧列強のアジアを制覇しようとする脅威のもうひとつの悪魔であった。

②大宮町のコレラ

コロリの噂と政情の不安

コレラ騒動の発端は、奇しくも安政五年五月二一日長崎に寄港した米艦ミシシッピから始まる。コレラに関する「袖日記」の初見は意外に早く、七月一六日の「昨日・近在急病人多しと申噂あり」の記事である。コレラ発生を指しているのか今ひとつ不明であるが、七月一九日になると「三日コロリ」であったことが判明する。

十七日頃・時候悪敷、近村急病流行、下方二多しと申事

吉原宿三日コロリと申病流行と申事、噂承る

安政五年の夏は「大ニ暑シ当年第一の暑也、夜も蒸」とか「覺わいて座しがたし、夜寝兼る大暑也」といった酷暑が続いた。

また、「袖日記」の筆者横関弥兵衛は近くは中比奈村の龍巻、遠くは越中国立山の山崩れ・山津波の情報から「当年八天地ニ水多し」の不吉な予感に襲われていた。

一方では天下泰平の御世を揺さぶる政情の不安である。

日米修好通商条約の勅許をめぐる内紛に將軍家定の継嗣問題が重なって幕閣を二分する対立に発展し、遂には一橋慶喜を擁立した水戸の徳川斉昭、越前福井藩主松平慶永らが、紀州藩主徳川慶福（のち家茂）を推した彦根藩主大老井伊直弼らによって追放され、安政の大獄をもたらすという政変劇に拡大した。

この間の情報を弥兵衛は次のように記録している。

七月一日には

堀田様御上京多分ハ御□之様子評判、下総国佐倉惣五の宮へ御祈願上京無難を御祈り千石の御朱印社内へ奉納

条約勅許を洩る京都朝廷を説得すべく上京する老中堀田正睦が大任の成就を祈願して、かつて堀田家が磔刑にした義民佐倉宗吾怨霊神を祀る宮へ千石の領地を寄進したというのである。世直しの佐倉宗吾を異国との条約勅許の祈願に登場させる手の込んだ噂である。翌二三日になると政変の様子が伝えられる。

風聞江戸海辺こんさつ

関東筋御番所往来止メと申事、是ハ虚説

本郷様御不首尾、野中村へ沙汰ある

江戸大もめ水戸御不首尾之由、堀田様引こみ

本郷様とはかつて將軍家定の御側御用取次で、若年寄に昇進して旗本

から大名へ立身したが、七月六日家定死去と同時に騒動に連座して罷免減封されて元の木阿弥となった本郷丹後守泰固のことである。野中村は本郷の知行所で、近村の正確な情報といえる。

一三日には將軍家定死去の報がさまざまな風聞と反応、複合してあらぬ虚報を生み出す。

江戸屋敷く騒動

当將軍様当六日に御他界之風聞あり

謀反人ある節、御毒害と申事、悪説まちく也

將軍家定の七月六日死去は正確な情報であるが、謀反人による毒殺の悪説が乱れ飛んでいるのは、この直後本格的コレラ騒動の前兆を形成する人々の心理に大きな影響力を与えた。

コレラの猛威

政情不安の噂を押しつけるようにコレラは次々と弥兵衛の住む大宮町に刻一刻と忍び寄っていた。

七月二〇日には吉原へ引越した「□屋甚兵衛の悴善二郎死去」の報、翌二一日は「吉原辺急病流行ボウショ一七日々拾四五人死去」と東海道吉原宿では急性の吐き気と下痢の症状で死者がつついていた。

七月二四日、吉原宿をはじめ近郷近在のコレラの情報は真実味を帯び、大宮町内に初めて死者が出て緊迫してきた。

昨日吉原宿にて葬式十三軒ありと申事、岩本・久沢・入山瀬辺昨日九件葬式あり、皆暑気変病之由、俄ニ心地悪敷と申と、吐瀉いたし、手足の筋をつめると即死ス、惣身黒くなると云り、熱病なるべしと云、何れ変病なり

近在急病多く、村々葬式たへず、一時殺し冒暑と云病とも申、又ハコロリと申

廿日吉原にて畑にて鎌を取ながら倒死ス

廿一日富士川船頭棹を取ながら倒死ス

丁内へ当病人初メ也

丁内浅屋おちへ殿三島宿へ病人の伽二行、類病うけ死去、今日駕籠ニて来ル、明日葬式、流行ボウショ病

加島ニテ二日コロリと申病也とぞ

吉原宿病死多し

死者の数を確認するためか、葬式数に注目している。またコレラの病名が確定出来ず、病状から「熱病」「変病」「冒暑」「コロリ」と変容していくのも、狼狽する人々の混乱を示している。そして遂に大宮町の知りに死者が出た。

八月三日にはコレラの猛威はおどろおどろしい惨状を呈してくる。

吉原々東へ海道松原ニ乞食・雲助など道路に倒れ死し多く、番太等の取納ルひまなく、狐狸是を食ひ臭氣鼻をうがつ、往来人通るに物淋しくすごしと言ひ、吉原宿斗りにて三百拾八人死亡、加島郷吉原迄先月下旬流行病にて死するもの千六百人と申事、病人へ狐とり付もの多しと申事

東海道の松原には乞食や雲助が倒れ死したま、放置され、死体が狐狸の餌となり果て、猛暑も手伝って死臭が鼻をうがき、夜ともなると物淋しい異界の雰囲気となった。コロリが狐・狼・狸を連想させていく噂である。日記の人弥兵衛は吉原の死者三一人、加島郷を含めて一六〇〇人という数字を留めている。しかも、この時点で妄想への第一歩とな

る「狐とり付」の風聞が記録された。

八月五日御藤元大宮町の「御料所(天領分)にて廿六人、社領(富士浅間神社領分)にて廿五人死去」と五一人、同一三日には一一人の死者を数えて記録している。そして八月一七日には吉原宿の死者は二三人と詳しい数字を示している。

医薬による治療

発病から一日から三日で即死するコロリの急襲に遭遇して、何とか医師と特効薬で厄病を逃れようと努めるのは、まず第一の対応であろう。

七月二十七日、「村々町方渡世休ミ」のなか、町役人はかつて代官柴村藤三郎支配時の享保一八年(一七三三)望月三英、丹羽正伯が「時疫流行候節此薬を用ひて其煩をのがるべし」と応急対策調剤を指示した触書を出し、町内へ配布した。

一、黒豆せんじ用

一、桑の葉もよし

一、茗荷の根もよし

しかし、一世紀前の処方箋では効き目は疑わしい。

これぞという薬を求めて情報が入り乱れる。

八月三日は支配葦山代官からの情報である。

葦山ひだ様伝ふり出し 懐中薬ト云

山査子耆奴 カミツレ花五分

藿香五分 木香三分

甘草六リン 茴香五分

右六味ふり出し一包分

此度之病ニよろし、

「葦山ひだ様」とは、葦山代官江川太郎左衛門英龍の侍医で、種痘実施で有名な蘭方医肥田春安のことである。

八月五日には富士川の川支えで吉原宿に逗留中の名医とやらの施薬伝授を書き付けている。

此度川支之節名医吉原へ逗留中、施しの薬伝授と申事、常に吞て病うけず

蒼木 桔梗 原朴 当帰 川芎 陳皮

白芷 半夏 枳殼 白苟 伏苓 肉桂

乾姜 〆十三味 各五分ツ、

麻黄、甘草三分

右十五味薑卜葱白ヲ入て煎用

薬もつかむ薬探しの努力も空しくコレラは蔓延してそこには日常的に死の世界がひろがっていった。

③ 死の恐怖と妄想

くだ狐の妄想

コレラ騒ぎが始まってから、町や村の生活はマヒ状況となった。人々は疫病を退散させる儀礼・呪術を求めて狂奔する。廻り題目、送り神、大日如来・マンダラの御開帳、昼夜の鉄砲打放し、道祖神祭、正月行事の復活等、前代未聞の多量死の恐怖にありとあらゆる除災儀礼で対応しようとした。こうしたなかで、世直し状況を暗示するかのような風聞がささやかれ、あっという間に広まって人々を不安に落としめていった。

八月三日、コロリを狐つきに結びつけた噂はたちまち人々をとらえ、コロリの症状とマッチさせて真実味を帯びてきた。

八月六日夜、弥兵衛は雨天のため丁内を締め切って、酒店を提供して悪魔払いの題目を唱えてもらったあと、次のように異変を記録している。コロリで急死した母の葬儀を片付け、丁内の御礼廻りに歩いていた金蔵が急に発病し、夕方には亡くなった。

今夜中宿ニて寄合、今日金蔵之病死ノ様あまり不思議ニ付、狐のわざにてハ無之哉と相談いたし、三峯山の生の御犬ヲ御かり申度儀神田丁・神田橋・山道へも及相談ニ皆々承知之上明朝惣代之者出立之積り

病死人のあまりに不思議な死に様に狐の仕業、祟りを妄想したのであろう。禦ぎの三峯山の眷属・御犬様まで登場している。

そしてより真実味を増す事態が発生する。

青柳丁山本や女房此間神棚を上るニ二度火きへたり、三度目上んとする時俄に横腹痛ミこぶ生ず、心付て狐ならんと思ひ表へかけ出てうなる、近処の人寄りて其処をもむニ痛忽直る、此儀阿幸地数馬殿二間候処狐なりと申由、猶股辺ニかくれ居る間気を付よと申ける由

すべて病人の手足へこぶ出来ルト筋ヲつめるよし

こぶ状の病状から狐が体内に侵入したという妄想である。

人体に潜入する狐といえば当然通常の狐では無理である。本来は人間の見る事の出来ないミクロの小動物、微細なくだ(管)をも通って体内に侵入、悪さをして遂には命を奪う「くだ狐」の伝承が妄想となって

甦り、伝播したのである。

東町方ノ人下へ行ニ高原を通る時くだ狐七ツ岩本ノ方へ下るを見
たと申事
是ハ地熊と申物のよし

不思議や人間の眼には見えない筈のくだ狐が七疋も徘徊しているのを
目撃したという記事である。別名を「地熊」というなどと想像上の妖怪
のキライもある。

「異」との習合

翌八月七日になると、くだ狐説は特定の病人を名指しして定説化して
来る。

此度の一日ころりの急病ハくだ狐のわざなるよし評判

西新町江戸や儀兵衛昨日死去、今日葬式、此人時候病氣へくだ
狐とり付きて、口バしるニハ我石あげ源右衛門を取殺したり、又
此男をころして夫から神田橋大和やへ行べしと言って死去致候よし、
此由◎々大和やへ沙汰ある

江戸屋儀兵衛の聲が死際に熱に浮かされたのか、石あげ源右衛門を取
り殺し、神田橋の大和やへ行くなどと口走ったことから、くだ狐に取り
付かれたと判断されたのだろう。名指しされた大和やが気にしているの
が、妄想が真実と受け取られ一人歩きするという異常事態を物語ってい
る。

そして八月一〇日、くだ狐が世直しの予兆の本流となって、世情を不
安に落としていく「異」と結びついた。くだ狐から連想する奇怪な異

獣の出現である。

根方川尻村にて異獣ヲとらへると申事
大サ猫のこたく馬ノ白にて胴ハハエ毛
足ハ人の如ク赤子の足ノ如シと申事

右之ことくの怪獣ヲ蒲原宿にても千年モグラ疋疋とると申事、十
三日ニ実説聞

一説ニ異国ノ廻シ者僧トナリテ狐ヲ数千船ニノセ来リ、此近海辺
へハナツ、右怪僧三島宿にて老人捕ル、ト申噂あり

根方方面の川尻村で異獣が捕獲されたとの噂である。猫のようで顔は
馬で胴に毛あり、足は人間の赤ん坊のようであった。東海道蒲原宿では
千年モグラという怪獣を一疋捕らえたという。一説には、異国のまわし
者が僧に身をやつして密かに狐を数千疋も船に積んでやって来て、この
近海の辺で放ったという（此の狐が取り付いてコロリを蔓延させている）。
このとき伊豆下田には公然と異国船が出入りし、安政大地震の津波に
際しては、ロシア船ディアアナ号が近くの駿河湾で沈没した。異国船・異
人が邪教切支丹とないませになつてまわし者の僧が異教の狐、千年モグ
ラを放ったという妄想をつくりあげたのであろう。

八月一三日になると宗高村の芋ほりが直接に聞いた実説として詳しい
情報となる。

桑崎米屋子息三峰山御犬かりて帰り、川尻親類二病人ある故御札
頂かせ二立より川尻村を通る時藪の中々怪き物うるくとして出
たり、若イ者奇集り打殺す、其形大キナル猫程ありて狐に似たり、
白ハ狐ノ如クなれ共大ニ長ク頂々鼻ツラ迄白キ筋あり、胴ハハイ
毛黒シ、足ハ猿之如ク足ノ裏ハヤハラカニして土をふむ物ニアラ

ズ

異獣御犬ノ威ニおされ形を顕シたる也、其名を知らず、異国ノ狐なるかとも申候、一名ジグマト云、吉田氏申ニ八千年モグラト云ヒ、喰ハ味ヒ美也

この異獣は、禦ぎの三峯の御犬の威に脅かされ迷い出たところを撲殺された。形状その他から異国の狐、一名ジグマ、千年モグラと断定された。そして「異」のイメージを強め、世直しの不穩の風聞に傾斜していく。

此度クダ狐ト申ハ此者ジグマ之わざなるよし、又曰此者ハ齒ハなし、只新墓ヲアバキ食フ獣也ト申事

右同人之咄し、伊豆下田へかゝりたる異船之内々小長持之如くなる箱ヲ出シテ日本ノ野師共へ渡スよし、是を見る人ありしと申事
矢倉沢ニて野師老人召捕るゝ、沼津ニて野師老人召捕るゝと申事

想像上の小動物くだ狐は千年モグラ、ジグマの異獣となり、伊豆下田へ停泊した異国船積載の小長持箱から日本の野師に渡されたというのである。

日本を侵そうとする異国とこれに手を貸す日本の野師、両者の使う手とされたのが異獣であり、まき散らしているのが即死病のコロリであるという恐るべき妄想である。

そして八月晦日には、江戸からの情報で通商条約勅許・將軍継嗣に絡む幕政中枢の混乱も加わって、アメリカからイギリスに「異」が変わって、くだ狐、千年モグラならぬ「疫鬼」を日本に放ったという風聞に変わ容している。

江尻ノ人江戸々当六日帰リ候と申咄し、先達而イキリス々交易頼

之印として大船一はい公方様へ進上の由、右船之大筒御ためし可有之由江戸へ御触其音ニ不驚様ニ御ふれ也、然処其夜半ニイキリス船行衛なく逃去り進上之御船のみ残し置、此船御改メ有之処イキリス人の衣類多クぬぎ捨船中ニ捨置てあり、其様子甚奇怪ニ付七月下旬御評議之由

或ハ噂ニ此船へ外国ノ疫鬼ヲふうじ込乗せ来り、日本へ放シ捨て逃帰りしと見へたりと申評判あり

イギリスが幕府に進上した大船とは、日英修好通商条約締結に來日した特派大使エルギンが贈った蒸気船エムペラー号（のちの蟠龍丸）のことであろう。これに種々の伝聞・噂等が次々と妄想を生んで、イギリス犯人説となったのであろう。

④コレラの除災儀礼——くだ狐に三峯山の御犬

諸種の除災儀礼

コレラ大流行が三日コロリから二日、一日と急死の模様が短縮するにつれ、人々の精神状態は極度の死の恐怖と医薬等による治療も不可能な無力感のなかに、その原因を人力の及びつかない摩訶不思議な憑霊現象に帰結させることとなった。くだ狐起因説が濃厚となり、「異」と習合して千年モグラ、アメリカ狐、イギリス疫鬼に成長した。

人々は当然コロリをもたらし、次々と伝染させるくだ狐、千年モグラ、アメリカ狐、イギリス疫鬼を退散させることに衆知を集め、行動する。

大宮町では、コレラの流行・蔓延するなかで自然発生的にさまざまな除災儀礼が行われていった。

大宮町の除災儀礼は東海道筋の宿村とは遅れ、丁内に死者が出始めた七月八日の廻り題目からである。

翌二八日には北山本願寺の靈宝ホウキマンダラの開帳があった。

北山本門寺御靈宝ホウキマンダラ先日田畑村へ請じて開帳ありし故、其村耆人も病人なしと云□二付、今日厚原村へ願ひ二行、御長持立宿本光寺迄来ル処、大宮信心の方にて願ひ、立宿新町辺へ御立より靈宝を開諸人二頂せ給ひける、夕方神田橋江御出ありて夫々重須へ御帰り二相成候

小晦日の二九日町内は送り神で除災する

今日両町方送り神、村山法印式人頼、彼是手間取、夜二入、てうちん二て送り神

疫病の厄を送り神で丁外へ送ってしまえという儀礼である。

八月朔日には「町方近在昼夜信心、鉄砲をはなす」と鉄砲を撃って悪疫の退散を図っている。翌二日には丁内を切って往来に座って三か所で題目を唱え、四日には西新町では「日待」をし「笹繩」を張り、夜には「家毎門口江大かがり火を焚」き「片がわ念仏にて歩行、片がわ題目連歩行」と仏教寺院檀徒総動員で禦ぎに懸命となっている。

こうした丁内毎に切って連日念仏・題目が繰り返されるが、コロリの勢いは衰えるどころかその猛威は益々強まり、八月五日には「是迄御料所にて廿六人、社領にて廿五人死去」となった。翌六日、中宿丁の金蔵が一日コロリで突然死した。どうもくだ狐が憑いているのではないかと、人々は不安と恐怖に駆られ、これに対抗するためには、三峰山の生の御犬を借りてくる以外にないと相談がまとまった。

三峰山御犬借用

早速、翌七日期、武州三峰山に向かって惣代の者五人が出発した。路銀・借料その他費用八両、御犬は四疋借用するつもりであった。くだ狐

の仕業説に定まるなかでも、正月のように道祖神の往来わくを直して竹宮を修復して祀っている。

因みに三峰神社は縁起をヤマトタケルの東征の伝承に遡り、ヤマトタケルを道案内した狼を眷属の神犬として祀り、武運長久、五穀豊穡はもとより、盗賊除け、不時の災難除けとして信仰をあつめた。狼を神の使いとしたりところから「四足除」の狐つき等に祈願されることとなった。

三峰神社の公式記録「日鑑」によれば、安政五年八月に入ると駿州・豆州・甲州方面の町や村からの御神犬拝借の登山者が急増している。一日には「日増二代参多、殊ニ東海道辺・江戸芝口・変病除心願ニ参詣御座候」と御犬拝借の代参の登山が東海道の宿々からそして江戸から変病コレラ除けの心願のため日増しに殺到し始めていた。そして八月二四日には貸し出した御眷属の御犬の「番数」が一万番に達した。即死病コロリ武州三峰を賑わすである。

八月一〇日武州三峰山へ御犬様借用に出掛けた一行が帰丁するとの知らせがあったのか、丁内の宮原へ四丁から、一、三人ずつが迎えに向かった。途中、万野原火打道から大宮町に入り、夜に氏神若之宮が御宿となり、「火の差合なき人斗りありて」（忌みのかかっていない人だけを選んで）御籠りをした。不思議にも、神田橋の御犬様を安置する郷蔵跡に、御犬の足跡があったという。しかも、その夜蔵屋敷の辺にて狐の鳴き声がしたともいわれた。

ところで、くだ狐に対抗する御犬様借用も大宮町の人々が予想していたような簡単なものではなかった。三峰山の対応には、種々信仰上の制約がつけられていた。

今夕武州三峰山之者帰町、生二見ゆる御犬をかり度由申候処、坊

ニテ申二ハ生ノカゲノと二色ハなし、左様ニうたがふ心ある処へハかしがたし、前々之通りかけニて遣スへしと申由、坊ハ壹軒ニ

テ大ナル家ノ由、酒造イタシテ不売、只参詣之者へ馳走ニいたす、御犬かり百五十人程諸国々居合候、二、三月頃毎年御犬かり人多シト申事（中略）当年ハ伊豆駿河両国別して犬かり多しと申

くだ狐を退散させる本物の犬をイメージしていた大宮町の人々に対して「生ノカゲノ二色」はない、疑う心があるところへは貸すわけにはいかないと言われ、御犬様のカゲになる御札（御幣）を頂戴することになった。そして、風呂敷に丁寧に包まれた御札は収める場所が未完成のため、一時氏神若之宮が仮の宿所となったのである。

八月一三日、漸く御飯屋が出来上がった。火の差合ない者を選んで若之宮から奉還した。

三峰山は大宮町の四町に対し、次のような御犬借用にあたっての掟書を渡している。

三峰山御犬借用掟書写シ

御眷属拝借指南

一、御けんそく御むかひ被成候節、道中にてきふく等無之家ニ而とまり可被成候

一、御在所江御帰着被成候ハ、即時ニ清浄の別火ニ而御焚上可被成候、格別及深更御帰宅被成候ハ、洗米ニても御備へ可被成候

一、御札勸請ハ御在所ニおいて鎮守の社、又は何れニ而も至極清浄之地ニ御宮あるひはかや、わらの類ニて宝殿御しつらひ被成、御信心ニ御祭り可被成候、尤穢濁之者、女人の立より候事、堅禁断可被成候

一、御供献上ハ毎月十九日晚、廿日講中御縁日、御日待可被成候、御講中の内御老人精進潔斎被成、切火ニて御焚上ケ可被成候、

但シなべきりの御供と申、残候とてもも外の人たへ申事不能成、御焚上の火ニてたばこニ而も御上り被成間敷候、万一無拠不祥御座候ハ、洗米御そなへ可被成候、女中方けつして御締被成ましく候

一、稻荷の社近く御くわんじやう御遠慮可被成候

一、御札御返済之儀拝借被成候月日迄ハ御差置不苦候、右之月日相後レ不申様ニ御返進可被成候

右之通御慎御信心専一ニ御座候、此外口上を以御伝授可申候、以上

月 日

武州三峰山

札場 役人

靈験新たであるためには神聖でなくてはならない。そのために聖と俗とを峻別する。御犬様がくだ狐をやっつけるためには、俗を断って聖の条件を保持する必要があった。起伏があつてはならない。清浄の別火、宝殿の設置、ケガレ、女人の立ち寄りの禁断、なべきりの御供等厳しい条件が付けられていた。この掟書の条件を蔵屋敷郷蔵跡では充たさなかつたためか、急に場所替えとなり、土橋となった。その間御札は丁内の宝殿に預かることになった。こうした御犬借用の儀礼が進むなかでも、ころりの猛威は衰えを知らず、「大宮町当病死者百拾八人と申事」と五日の五一人の二倍強にのぼっている。

八月一九日は掟書にある御供献上の祭日にあたる。

今夕、三峰山祭日清浄御供焚上奉納 □中御日待いたす

三峯の御犬様の記述はその後何故か、少なくなる。八月二九日に効験

安政5年大宮町のコレラと宗教儀礼（行為）

月日	仏 教			神 信 仰			民 俗 宗 教		
	周 辺 地 域	大 宮 町 内	弥兵衛家	周辺地域	大宮町内	弥兵衛家	周辺地域	大宮町内	弥兵衛家
7月26日	村々農業をやめ宗旨の信心								
27日		廻り題目始める							
28日	北山御霊宝ホウキマンダラ開帳								
29日		村山法印送り神						送り神	
8月1日								町方信心鉄砲	
2日		町内ノ切題目			丁内中浅間様御参り				
3日	村山大日如来加鳥へ開帳	村山大日如来身延八之宮日延上人東漸寺上人来る							
4日		片がわ念仏 片がわ題目歩行						日待 西新町かがり火焚	
5日					休日御参り			日待 町内かがり火焚	
6日		町内ノ切題目	町内ノ切題目 みせて唱える		三峯山御犬拝借代参 出立				
7日								道祖神をまつる 正月のごとく往来	
10日	松野村若い者僧形水ごり題目				代参焼町				
15日		身延山信者講より 代参出立							
18日					三峯山祭日焚上 日待				
23日					浅間様葦山代官御頼 の祈禱				
28日							伊豆内浦辺家毎門牌立て 一村死去の体なる呪い 岩淵蒲原辺正月仕直し		
晦日					西新町毎夜かがり火焚 神燈をつけ神勇め		野中村正月仕直し		
9月4日			和泉屋で高祖・鬼 子母神像開眼						
6日			靴屋三島圓明寺上 人祈禱						
8日							淀師村観音花角力興行		
11日									日待
10月10日 ~14日			身延行						
21日			鬼子母神開眼 星まつり						

を疑ったものが神罰を受けたという記事のみである。

江尻にて三峯山御犬ヲカゲニてかり、是ヲ疑ひて神罰を受けし人あり

津島天王ヲ疑ひて興津在名主死絶ルアリ

神罰をもものとしないうコレラの猛威に人々は三峯山の御犬の靈力に疑いを持ち始めていたのである。

⑤民衆の宗教構造

コレラ騒動と民衆の宗教行為

突如人々を襲った安政五年のコレラ騒動は、視点を変えれば幕末期における民衆の広義の宗教、換言するなら心意ともいうべきものとその構造を知るための、ひとつの有力な手がかりを与えてくれるのではないか。未曾有の生命の危機に直面したとき、人々はどのように生きようとしたのか。どのような救いを求めようとしたのか。コレラという未知なる流行病に医療をもって対抗するのは正当な対応である。しかし、これを圧倒して蔓延する即死病コロリを目の当たりにしたとき、宗教や信仰の世界に向かうことは必然であった。宗教や信仰というだけでは、抽象的にはつきりしない。ディテールのところで実態は何であったのか。呪術や習俗などを含めた民俗儀礼を視野に入れて民衆の動向を考察していかなければならない。いずれにせよ、一筋縄では掌握不可能な民衆の宗教・信仰行為と心意とその構造を知る上で、安政五年のコレラは突発的時間、空間は限定されるが、絶好の機会ともいえる。少なくとも、ひとつの実証データを提示することは可能である。

民衆の宗教といえば、本来は宗門改制下の檀家制度で裏付けられた葬

式仏教の宗派信者という範疇でくくれる筈である。これに所属する町や村の共同体の信仰である神信仰（氏神・鎮守）の氏子であることを加えればこと足りると考えればよい。ところが、内実においては両者は習合し、多くの部分を共同体や家の習俗・儀礼の中で生活し、精神世界においては様々な呪術や迷信に依存して生きているのが現実であろう。民衆の広義の宗教は、旧来の宗教史（仏教・神道）に加えて民間信仰・民衆思想の名称に明らかなように、戦後民俗学や歴史学の花形の研究分野であった。しかし仏教史、神道史、民間信仰史、民衆思想史等、縦割りの専門分野の研究の深化はあっても、これを総合化し、分析することがなかった。一例を挙げれば、ここ数十年めざましく出版され続けている地方史誌（県市町村）を繙いてみれば、民衆の宗教を取り上げていないものは皆無である。がしかし、多くの頁を割いてはいるものの歴史と民俗が分裂気味のバラバラの記述である。

錯綜と混沌の宗教構造

とりあえず、「袖日記」に認められる民衆が走った宗教行為の記事を抽出してみることである。そして宗教構造を視野に入れるならば内容を分類する必要がある。

第一は宗門改、檀家制で決められた特定仏教宗派の寺の檀家（信者）であるという意味での仏教関係が考えられる。一般に葬式仏教といわれ、強制や形式上の信仰と見做されがちであるが、死者を葬送、先祖を祀る仏教の影響は大である。

第二には人々が生活をともにする村と町の氏神・鎮守等の神信仰の類である。コレラの流行は共同体存亡の危機でもあり、神信仰が作動することは当然考えられる。

第三は、仏教・神信仰では片付けられないさまざまな宗教行為、呪術等をともなった儀礼（民間信仰と表現する向きもあるが）を、ここでは

民俗宗教と呼ぶことにして分類した。

三分類に加えてこれら宗教行為がどこで誰らが行ったかによって、①周辺地域②筆者弥兵衛が居住する大宮町内③日記の筆者自身の横関弥兵衛家に区分してみた。

というのは、宗教を構造的にとらえようとするためには、時間とともに儀礼行為の主体が問題になってくると考えたからである。かくして作成したのが「安政五年大宮町のコレラと宗教儀礼(行為)」の表である。

弥兵衛が眼にし、耳にしたコレラの厄災を除去する宗教儀礼(行為)を記録したのは、安政五年七月二六日から一〇月二一日までの約三ヶ月間、記載日数二七日である。

この表から大宮町の人々の宗教行為の構造に関し、三点の特色を指摘したい。

第一に人々の宗教儀礼の性急さと混迷ぶりである。藁をもつかむ緊急緊迫した状況での除疫儀礼であるにしても、題目マンガラや村山の修験の力を借りつつも、一転して三峯山の御犬拝借に走ったり、正月をやり直して厄を払おうとしたりする。効能があると聞けば飛びついて何でも祈願してみようという宗教は、節操のない多神教の現世利益のやり方である。

第二に、儀礼の多様、多彩さに驚かされることである。弥兵衛家の檀那寺である日蓮宗(東漸寺)の關係から来る廻り題目、「身延山」等、また大宮町の氏神浅間神社の、町内挙げての祈禱等の記事が認められるが、これらと伍して送り神、信心鉄炮、道祖神等の民俗宗教の儀礼も無視できない。また、仏教、神信仰に連なるとはいえ、村山法印の修験や三峯山の御犬拝借といった日常の信仰圏外への働きかけが目につく。

第三には、おぼろげながら明らかになる弥兵衛家の三カ月に及ぶコレラとの闘いの動静である。

弥兵衛は信心する日蓮宗の廻り題目に参加主催することから始まり、

マンガラの開帳、氏神浅間神社の参拝等、日常の信仰圏のシステムに従って励行する。ところが、あまりのコレラの猛威に三峯山の御犬拝借、村山の大日如来の開帳、鬼子母神の開帳等、非日常宗教の儀礼に頼る行為に出る。コレラ騒ぎの鎮静化とともに再び日蓮信仰の身延山行の修業に顕著のように、日常信仰する日蓮宗の信者の宗教行為に回帰していった。コレラ騒動にみる複雑な宗教構造を仏教、神信仰、民俗宗教に三分して分析を試みたが、当然ひとつの宗教で論じることは出来ない。儀礼行為同士の習合が認められるだけでなく、宗教者自身が民衆の心意に同調し、宗教教義上の禁欲・厳密さが欠けている。さまざまな宗教儀礼が錯綜しながら、コレラを除去したい、逃れたいとの唯一の願いに向かって収斂しているのが実態である。これらを無理矢理総合化するよりもむしろ、この混沌がまさに宗教構造であるといった方が適切なのかもしれないのである。

おわりに

猖獗を極めるコレラの恐怖に追い詰められ、世情の不安、天変地異、そして「異」と次々と黒い噂を巻き込んで妄想はふくらみ、民衆の心意は一種独特なオルギー状況を現出する。当然この危機的状況から救済されるためにあらゆる除災の儀礼・呪術を動員して、心意の安定を図るが、必ずしも即座にコレラの恐怖は退散するわけではない。

三峯の御犬がジグマや千年モグラ、イギリスの疫鬼の退治の決定打にはならないのである。

八月晦日にはホヲキ星が現れ、西南へ向かって尾を引き、また江戸の政情は不安を募らせている。

九月に入ると三峯の記事は消え、鬼子母神像の開眼、日廷上人本尊開帳等の除災儀礼は次々と続けられている。そして九月六日、江戸のコレ

ラ的狀況が記録されている。

江戸にて此度病死之者共廿一万三千人之由、川成村へ江戸・書状
到来実説

但シ此内人別之者十三万七百廿四人也

江戸惣人別五十万人と申事

八月廿五、六日頃々別して多ク死シ

江戸の町方人口約五〇万はいいとして、詳細な数字が伝えられている。
横関弥兵衛が安政五年のコレラ騒動にひとつの区切りをつけたのは、
一〇月一〇日から一四日までの四泊五日の「身延行」であった。

ひとつ厄災をふっきれない弥兵衛は、身心のケガレを除去するため日
頃信心する日蓮宗の絵本山身延山参詣修業の旅を思い付いた。一〇日は
身延中町の旅籠古屋善右衛門泊まり、夜は仁王様に参拝して題目修業。

一日は未曉出立して甲州一円に流行する「よさこい」がコレ
ラの流行と一致するとの噂を耳にしながら七面山へ向かった。途中、妙
法大善神を詣で、十万部・妙法両大善神本社、摩利支天王に参拝、万年
橋を渡り七面山大鳥居をくぐって雪の降るなか七面山登山道へ。三六丁
目の坊へ一泊、その夜は一睡もせず終夜題目修業。一二日は未明出立、
いよいよ七面山の奥の院へ。祖師開帳、子安鬼子母神、薬師堂等次々と
諸所を夜半まで順拝して鬼子母堂へ一泊。一三日は東谷の諸所を順拝。
武田信玄ゆかりの古鐘、御真骨、経堂等参拝、御条の間評定所の取次で
院代様に御目にかかり、講中懸金一両を渡す。更に、貫首様に御目見へ、
御経、御言葉まで頂戴し、本尊二幅（料金一〇〇疋）を手に入れ祖師堂
開帳、貫首様の説法を聴講、あわただしく土産物を調達して帰途へ。こ
の日は遅く南部村松本屋泊まり、一四日に帰宅する。

弥兵衛にとっては、やはり身近な信心の対象である日蓮宗の身延山順

拝が、ひとつの修業の場としても身心を新たにす儀礼であった。

大宮町弥兵衛の「袖日記」にみられる人々の、安政五年の夏の異常な
体験は何を物語っているのか。町人弥兵衛はこの生死をさまよう体験か
ら何を学んだのか。幕末から維新へ、世界史の大激動のなかで近代国家
が難産ながら誕生し、近代社会がつくられていく過程で、ひとつの免疫
となったことは明らかであろう。

註

- (1) 関連論文①参照。
 - (2) 見市雅俊『コレラの世界史』(晶文社、一九九四年)、『コレラの流行と近代ヨ
ロッパ、青い恐怖白い街』(平凡社、一九九〇年)
 - (3) 山本俊一『日本コレラ史』(東京大学出版会、一九八二年)、立川昭二『近世病
草紙—江戸時代の病氣と治療』(平凡社、一九七九年)
 - (4) 袖日記は現在富士宮市市民文化会館に保管されている。大宮町については『な
つかしの町名をたずねて—富士宮市の町名今昔—』(富士宮市教育委員会、一九
九二年)。
- なお本稿は国際日本文化研究センターの北米シンポジウムで二〇〇二年一月一六日
に発表したものである。

関連論文(1)③を併読されたい。

- ① 高橋敏「幕末民衆の情報と世直し意識の形成—「年代記」のフォークロア」
『静岡県史研究』二二号、一九八六年)
- ② 高橋敏「幕末維新期における民衆の「異」意識—
桜井徳太郎編『日本社会の変革と再生』弘文堂、一九八八年)
- ③ 高橋敏「黒船・狼烟・狼糞—紀州藩有田郡山保田組村々の狼糞の拾い集め」
(平川南・鈴木靖民編『烽(とぶひ)の道』青木書店、一九九七年)
- ④ 高橋敏「安政五年コレラと吉田神社の勧請—駿河国駿東郡下番貫村・深良村のコレ
ラ騒動—」(国立歴史民俗博物館研究報告平成一六年三月刊行予定)

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

(二〇〇三年一月一五受理、二〇〇三年五月九日審査終了)

Fear and Delusion in Bakumatsu Japan: The Cholera Disturbance in Omiyacho, Suruga Province

TAKAHASHI, Satoshi

How do people confront life-threatening dangers when they strike? In Japanese history, people have faced repeated cataclysmic disasters and infectious epidemics ("diseases of instantaneous death"). With the scientific revolution and the advance of civilization in modern times, it is easy to think that people's fear of death has receded. The stir caused by SARS in 2003, however, reminds us that mortal fear is still close by. This study attempts to demonstrate the dangers and state of panic caused by the sudden outbreak of cholera in Ansei 8/1858. Focusing on the concrete example of Omiyacho, Suruga Province (modern-day Fujinomiya City), the study asks how people responded to the dangers attending the attack of cholera, feared by people as a "disease of instantaneous death." The study begins with a reading of the meticulously recorded journal of an Omiyacho townsman.

After coming ashore at Nagasaki with the crew of an American ship, the cholera bacterium spread further and further east, infecting people with a strange illness and producing an unprecedented number of deaths. Numerous medical efforts were taken against the disease, efforts which also generated a wide and diverse body of information that fed the spread of fanciful accounts of the disease. As if the world were turned upside down, people witnessed the destruction of the psychological frameworks that had offered them peace of mind. In response, they sought help through the use of pacifying magics of all kinds.

As cholera spread across space and time, people became increasingly active as they struggled with the strategies of a nonquotidian, otherly world.

Based on a traditional superstitious belief, people identified the source of the disease in the workings of the fabled kudagitsune fox. To keep the fox away, they installed wolves and, in particular, sought to borrow the famed dog of Mt. Mitsumine. Also, a strong local belief in the efficacy of Mt. Shichimen, a mountain associated with the Nichiren sect of Buddhism, also prompted people to climb the mountain for its reputed powers to inhibit the disease.

It is in the actions of people under extreme conditions that the psychological structure of an era and society are laid bare.
